白椿

夢野久作

ちえ子さんは可愛らしい奇麗な児でしたが、勉強がきらいで遊んでばかりいるので、学校を何べんも落第しました。そしてお父さんやお母さんに叱られる毎に、「ああ、嫌だ嫌だ。どうかして勉強しないで学校がよく出来る工夫は無いかしらん」と、それればかり考えておりました。

ある日、どうしてもしなくてはならぬ算術をやっておりましたが、どうしてもわからぬ上にねむくてたまりませんので、大きなあくびを一つしてお庭に出てみると、白い寒椿がたった一つ蕾を開いておりました。ちえ子さんはそれを見ると、「ああ、こんな花になった

らいいだろう。学校にも何にも行かずに、花が咲いて人から可愛がられる。ああ、花になりたい」と思いながら、その花に顔を近づけて香(にお)いを嗅(か)いでみました。

その白椿の香気のいい事、眼も眩(くら)むようでした。思わず噎(む)せ返って、

「ハックシン」

と大きなくしゃみを一つして、フッと眼を開いてみると、どうでしょう。自分はいつの間にか白い寒椿の花になっていて、眼の前にはちえ子さんそっくりの女の子が立ちながら自分を見上げております。

ちえ子さんはびっくりしましたが、どうする事も出

来ませんでした。只呆れてしまって、その児の様子を見ておりますと、その女の児は自分を見ながら、

「まあ、何という美しい花でしょう。そしてほんとにいいにおいだこと。これを一輪ざしに挿して勉強したいな。お母様に聞いて来ましょう」

と云いながらバタバタと駈けて行きました。

しばらくすると、ちえ子さんのお母さんが花鋏を持ってお庭に降りておいでになりました。

「まあ、お前が勉強をするなんて珍らしい事ねえ。お前が勉強さえしておくれだったら、椿の花くらい何でもありませんよ」

と云いながら、ちえ子さんの白椿をパチンと鋏切って、一輪挿しにさして、ちえ子さんの机の上に置いておやりになりました。

ちえ子さんは机の隅から見ていますと、女の児はさもうれしそうに可愛らしい眼で自分を見ておりましたが、やがて算術の手帳を出しておけいこを初めました。

ちえ子さんの白椿は、真赤になりたい位極（きま）りが悪くなりました。算術の帳面には違った答えばかりで、処々にはつまらない絵なぞが書いてあります。女の児はそれをゴムで奇麗に消して、間違った答えをみんな直して、明日（あす）の宿題までも済ましてしまいました。そ

れを見ているうちにちえ子さんは、算術のしかたがだんだんわかって来て面白くて堪らず、自分でやってみたくなりましたが、花になっているのですから仕方がありません。

　そのうちに女の児は算術を済まして、読本を開いて、本に小さく鉛筆でつけてある仮名を皆消してしまいました。おさらいと明日（あす）の下読が済むと、筆入やカバンを奇麗に掃除して、鉛筆を上手に削って、時間表に合せた書物や雑記帳と一所に入れて机の上に正しく置きました。それから机の抽斗（ひきだし）をあけてキチンと片づけて、押しこんだいたずら書きの紙屑や糸くずをちゃんと展（の）

ばして、紙は帳面に作り、糸は糸巻きに巻きました。その間のちえ子さんの極りのわるさ！　消えてしまいたい位でした。

女の児はそれから、台所で働いていらっしゃるお母様の処へ走って行って、手を突いて、

「お母さん、お手伝いさせて頂戴」

と云いました。

お母様はしばらくだまって女の児の顔を見ておいでになりましたが、濡れたままの手でいきなりしっかりと女の児を抱きしめて、

「まあ、お前はどうしてそんなによい子になったの」

と云いながら、涙をハラハラとお流しになりました。

白椿のちえ子さんは身を震わしてこの様子を見ておりました。ちえ子さんもお母さまからこんなにして可愛がられた事は今まで一度も無かったのです。あんまり羨ましくて情なくて口惜(くちお)しくて、思わずホロホロと水晶のような露を机の上に落しました。

それからこの女の児がする事は、何一つとしてちえ子さんを感心させない事はありませんでした。

遊びに誘いに来るわるいお友達はみんな、お母様にたのんで断って頂いて、よいお友達と遊ぶようにしました。

「ちえ子のちえ子の大馬鹿やい。ちえ子の知恵無し落第坊主、一年二度ずつエンヤラヤ、学校出るのに……ツーツータアカアセ」

と悪い男の生徒がはやしても、家の中（うち）から笑っていました。

そのほか勉強のひまには編物をお母さんから習いました。夜はお祖父さまの肩をもみました。お母様のお使い、お父様の御用向でも、ハイハイとはたらきました。そうして自分の事は何一つお母様やお祖母様に御迷惑をかけませんでした。

お家の人は皆驚いて感心をして賞め千切って、いろ

いろのものを買って下さいました。しかし女の児はそれを大切にしまって、今までちえ子さんが使い古したものばかり使いました。

けれどもお家の人よりも何よりも驚いたのは学校の先生でした。今までは何をきいてもうつむいてばかりいたちえ子が、今度は何を聞いてもすっかり勉強しておぼえていて、時々は先生も困る位よい質問を出します。

そればかりでなく、今まで運動場で遊んでいても、直（すぐ）に泣いたり、おこったり、すねたり、よけいなにくまれ口をきいたりして嫌われていたちえ子が、急に親

切にやさしくなって、どんな遊戯でもいやがらずに、それはそれは元気よく愉快に仲よく遊びますので、友達の出来る事出来る事。今まで寄り付かなかったよいお友達が、みんな遊びたがってお家にまで来るようになりました。

女の児はいつもよいお友達と音なしく遊んで、音なしく勉強しました。

来るお友達も来るお友達も、みんなちえ子さんの机の上の一輪ざしに生けてある白椿の花を賞めました。その時女の児はいつもこう答えました。

「あたしはこの白椿のようになりたいといつも思って

います」

「ほんとにね」

と友達は皆、女の児の清い心持ちに感心をしてため息をしました。

ちえ子さんの白椿は日に増し淋しく悲しくなって来ました。「あたしのようなわるい児はこのまま散ってしまって、あの女の児が妾（あたし）の代りになっている方がどれ位みんなのしあわせになるかもしれない。どうぞ神様、妾の代りにあの女の児がしあわせでいるように、そうしていつまでもかわらずにいるように」と心から祈って、涙をホロホロと流しました。

その中(うち)にだんだん気が遠くなって、ガックリとうなだれてしまいました。

×　　　×　　　×

「まあちえ子さん、大変じゃないの。総甲を取っているのに、何だって今まで見たいに成績を隠すのです。お起きなさいってば、ちえ子さん。そんなに勉強ばかりして身体(からだ)に障りますよ」

とお母さんの声がします。フッと眼をあけてみると、

ちえ子さんは算術の本を開いてその上にうたた寝をしているのでした。

眼の前の机の上の一輪挿しには椿の枝と葉ばかりが挿さっていて、花はしおれ返ったままうつ伏せに落ちておりました。

底本：「夢野久作全集1」ちくま文庫、筑摩書房
１９９２（平成４）年５月22日第１刷発行
※この作品は初出時に署名「海若藍平（かいじゃくらんぺい）」で発表されたことが解題に記載されています。
入力：柴田卓治
校正：もりみつじゅんじ
２０００年１月19日公開
２００３年10月24日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。